

Ⅲ 病弱教育部

1 病弱教育部の概要

病弱教育部では、独立行政法人国立病院機構南京都病院に入院し、本人と保護者が本教育部への転入を希望した児童生徒を対象に教育を行っている。喘息・アトピー性皮膚炎・腎炎・肥満症などの慢性疾患や腹痛・頭痛などの身体症状を伴う小児心身症・身体虚弱及び小・中学校での生活が困難で入院加療が必要との診断を受けて入院した児童生徒である。最近の傾向として、発達障害を併せ有している、また、友人関係に不安を抱え不登校になり、基本的な学習習慣や当該学年の学習内容が身につけていないなど、対人関係や学習面に課題のあるケースが多くなっている。

在籍期間は2ヶ月くらいから1年以上と様々であるが、保護者・病院・前籍校・地域の福祉等関係機関との連携を密にすると共に、個別の教育支援計画・個別の指導計画を作成して個々の児童生徒の教育的ニーズに応じた指導・支援を進めている。

特に、前籍校から本校への転入に際しては、個々の児童・生徒の立場に立ってその子を理解し、また、具体的な支援を考える上で実態把握を大切にしている。そのために本人・保護者面談、前籍校からの学習や生活状況の引き継ぎ、主治医からの病状等の聞き取り、発達検査や心理検査等を行っている。

また、転出の際は個別の指導計画等を活用し、本校での学習や生活状況、病状への配慮事項等を丁寧に伝えることにより前籍校でスムーズに生活できるよう引き継ぎを行っている。

(1) 指導目標

豊かな心とたくましく生きる力を育てる

—自信を持たせる指導の充実—

- (1) 病状に留意して生活する力を育てる。
- (2) 自主性や創造性を育てる。
- (3) 豊かな人間関係を育てる。
- (4) 自主的に学習する力を育てる。

(2) 教育課程

教育課程表

教科・領域		教 科									道徳	特別活動	外国語活動	総合的な学習の時間	自立活動	週合計時間数
学年	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育							
小学部	1	8	-	4	-	3	2	2	-	2	1	1	-	-	2	25
	2	8	-	5	-	3	2	2	-	2	1	1	-	-	2	26
	3	6.7	2	5	2.6	-	1.7	1.7	-	2	1	1.3	-	2	2	28
	4	6.7	2.4	5	3	-	1.7	1.7	-	2	1	1.5	-	2	2	29
	5	5.1	2.6	5	3	-	1.2	1.4	1.7	2	1	1	1	2	2	29
	6	5	2.9	5	3	-	1.1	1.4	1.6	2	1	1	1	2	2	29

教科・領域		教 科									道徳	選択	特別活動	総合的な学習の時間	自立活動	週合計時間数
学年	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭	英語							
中学部	1	4.2	3.2	3.2	3.2	1.3	1.3	2.4	2	3.2	1	0	1	2	2	31
	2	3.2	3.2	3.2	4.2	1.3	1.3	2.4	2	3.2	1	1	1	2	2	31
	3	4.2	3.2	4.2	3.2	1.3	1.3	2.4	1	3.2	1	2	1	2	2	31

ア 教育課程について

本教育部は、小学校・中学校の当該学年に準ずる教育課程を基本としているが、児童生徒の実態に合わせて変更する場合もある。

自立活動は週当たり2時間とし、1時間は授業時間内にロング自立として毎週実施し、もう1時間は朝学活の前にショート自立として15分ずつ週3回実施している。

中学部の選択教科は、2・3年生で英語を学校選択、3年生で音楽か美術を生徒選択としている。

イ 校時

1単位時間は、入院する病院の日課等の関係から、小・中学部ともに45分としている。

8:35	8:50	9:00	9:55	10:50	11:45	12:30	13:15	13:35	14:30	15:15	15:30	16:00	
朝の活動	朝の会	1校時	2校時	3校時	4校時	昼食休憩	健康観察	診察	5校時	6校時	清掃	終りの会	放課後学習

2 病弱教育部の研究活動の概要

(1) 研究テーマ

一人一人のライフステージを考えた指導の工夫

(2) テーマ設定理由

前述のように、本教育部は小児慢性疾患だけの入院は少なく、心理的また発達障害等の課題を併せて抱え転入してきている場合が増えてきており、人間関係をスムーズにとることが苦手な児童生徒が多いという現状がある。また、家庭環境の課題により、一時避難的な対応で入院してくるケースもある。このような現状を踏まえて、学校生活を生き生きとしたものにし、一人一人が心豊かに充実した人生を送るためには、目の前にある課題解決だけではなく、将来へ向けての連続性を意識した支援が重要になってくる。

「人は生涯、学びながら自己を成長させる。」という観点を持ち、一人一人のライフステージにおける課題点を整理し、支援方法を考えていくことを共通理解し、研究テーマとして設定した。転出後の生活や将来も見据え、安定した学校生活や社会自立を視野に入れた教育の推進を図るという視点でも取り組んでいきたいと考えた。

3 病弱教育部の実践

(1) 小学部の取組

自分で考え、表現できる人間に ～前籍校の集団に戻るために～

ア プロフィール

学 年：第5学年 男子

診 断 名：中等度肥満、気管支ぜんそく、アトピー性皮膚炎、不登校

在籍期間：7か月

イ 転入までの経過

保 育 園：泣いて登園を嫌がるようなことはなかった。

小学1・2年：入学式の次の日、学校に行くのを泣いて嫌がった。姉に引っ張られて登校していた。

3 年：中ごろから朝からの登校するのが困難になってきた。登校できたとしても2、3時間目ぐらいからであった。3学期からはほとんど登校できなくなった。

4 年：登校できなかった。3学期には昼夜逆転していた。「学びアドバイザー」のもと別室で16時30分から19時ごろまで学習指導を受けていた。

5 年：4年と同じ状態が続き、病気の治療を名目に本人を説得し入院することになった。

ウ 実態と目標設定

(ア) 5年生での実態（1回目の入院）

A 児は短期入院のつもりで入院して来ていたが、周囲の強い説得により治療をしながら本校に通うことになった。

前籍校では、登校を渋っていても学校に行ったら遊んでいる、体育の授業がある日は学校に行くにくい、アトピー性皮膚炎が原因でいじめられた、等のエピソードがあった。

帰宅後は、友達と遊んでいて嫌なことがあっても断れず、泣いて帰宅して来たり、トラブルが発生しても自分からは何も言えなくなったり、次第に行動を起こさなくなっていた。また、家で何かやりたいことがあった場合「ああしたい、こうしたい。」とは言うが、「どうしたいの。」と具体的に聞くとその回答はなく、最終的にはほとんど母親が決めてしまっていた。これまで自己決定や自己選択をして行動に移す経験はほとんど無かったようであった。

不登校の期間が長く、家に閉じこもり昼夜逆転の生活をしていることが多かったため、人と関わることや体験不足から自分で判断を下すことを苦手としていた。また、その学年であれば知っているであろうと思われる一般常識に関しても、興味がなければ全く知らないということも多かった。バスケットボールは大好きで休みの日や夜に兄に相手をしてもらうことがあった。

学習については、不登校のため未学習部分はあるものの、学習したことを理解する点においては特に配慮を必要とはしないが、漢字の書き取りや自分の考えを文章で表現することを苦手としていた。体育は、バスケットボール以外はほとんど経験していない。

《WISC-Ⅲの結果》

- ・ 知的水準は平均の下、VIQ と PIQ には有意差はない。
- ・ 群指数では、知覚統合が処理速度に対して 15%水準で有意に高いという結果であった。
- ・ 言語性下位検査では、＜単語＞と＜理解＞が平均より低く、動作性下位検査では＜絵画完成＞が平均より高く、＜符号＞が低かった。

《検査から見られる特性》

- ・一般的な知識や抽象的な思考能力はあるが、的確な言葉で表現する表出の部分での弱さがある。そのため、自分のもっている言葉の力を実際の生活場面、友達関係で使うことが難しい。
- ・具象物の細部への気づきはあるが、有意味、無意味刺激にかかわらず、全体のイメージがつかみにくく、部分と全体を把握する力や組み立てていく力が弱い。分解・統合など操作するためには、何らかの手がかりがないとわかりにくい、視覚的な手がかりがあれば試行錯誤する力はある。
- ・場面の変化や新しい状況に対応するのに苦手さがある。
- ・視覚的短期記憶、目と手の協応の弱さ（不器用さ）があり、書字の苦手さにつながっている。

(イ) 目標

- 自分の意見をもつ。
- 自分の思いを言葉で表現する。
- アトピー性皮膚炎を改善する。

エ 取組内容

自分の意見をもつためには、この学校にいる間にいろいろな体験をさせることが大切であると考え、教育課程全般にできるだけ多く体験的な学習を取り入れることにした。また、体験したことや学習したことをまとめて話したり書いたりすることにも多くの時間を割いた。中核に位置づけたのが総合的な学習時間と自立活動である。各教科や活動において目標を達成するために以下のようなことに留意しながら取組を進めていった。

教科・活動	特徴的な学習内容等
国語	<p>文章による表現：自分の意見を自分の言葉で表現するためには、説明文では、書かれていることをきちんと読み取ること、物語文では、言葉を手掛かりにしながら、その時の登場人物の気持ちを読み取ることが大切にした。特に物語文を読んで、自分が思ったことや登場人物の気持ちを考える部分に課題が見られた。当初、発問に対して固まってしまうことが多く、教師も指導者の役割と、児童の役割の両方を演じ、気持ちの読み取り方、表現方法を実際に読み取っていく中で指導した。</p> <p>また、文章にまとめることを苦手としているため、文章を構成する学習にも力を入れた。初めは、A児と相談しながら、書く内容の柱立ての方法について指導した。そうすることにより内容が十分理解できている場合においては、少しずつ自分の言葉で書き表せるようになってきた。</p> <p>漢字の書き取り：漢字の書き取りに関しては、1年生の漢字が書ける程度であった。口・大・木・山等漢字を構成している一部分は習得できていたので、一つの漢字を分解して再構成する方法を試みた。白板に色を変えて書くよりもカードに漢字を書き、それを分解して組み合わせるほうがわかりやすくことも判った。「これをやったら、漢字を覚えられそう。」という言葉が出てきた。漢字組み合わせゲームとしてやると楽しみながら漢字を覚えることができた。</p> <div data-bbox="726 1821 1428 2069" style="text-align: right;"> </div>

算数	問題を解く過程を大切にしている指導をした。考え方を文章化したり、わかりやすく説明したりできるようになった。
理科	実験観察を中心に理解できたことや調べたことをまとめるため十分な時間を確保した。
社会	5年の学習をしながら未学習部分の知識を身につけた。
音楽	歌唱や楽器演奏を通して表現力を養った。
図工	基礎的な技術を身につけながら、構図や彩色の面でアドバイスをを行い、自分自身で決定していくことを大切に進めた。
体育	「嫌い」という先入観を持たせないように小さなことでもほめ、自信がつくように指導した。また、できるようになったことが実感でき、「体を動かすことが好き。」とまで言うようになった。
自立活動	<p>アトピー性皮膚炎：手や足のよく見えるところにアトピー性皮膚炎があったため、気温が高くなった時や運動後の汗を処理し清潔に保ち、習慣化できるように、保健室とも連携し皮膚の手入れの学習を行った。規則正しい生活や、ストレスとアトピー性皮膚炎との関係も病識学習として行った。</p> <p>自転車：前籍校に戻った時を想定し、友達と遊ぶ時や行動範囲を広げるために自転車が必要だと考え、自転車の練習を取り入れた。退院する頃には運動場で自転車を乗り回せるようにまで上達した。</p> <p>バスケットボール：バスケットボールを通してクラスの子とつながっていくことを考え、シュート、パス、ドリブル等の個人技を磨いた。部内の児童生徒数が少なく試合ができないため、介護等体験の機会に来校している大学生達を交え試合も行った。取組当初は、試合時間中走り続けることができなかったが、体育や自立活動の中で持久力もついてきて、試合終了時間まで活動することができるようになってきた。</p>
総合的な学習の時間	<p>畑仕事：年間を通して畑に関する学習をした。将来の職業選択として農業も視野に入れていたので、楽しく畑での作業ができるように心がけた。土づくり、夏野菜、大豆の種まきから始め、収穫できるまで水やりや草取りをした。</p> <p>青谷の梅：地元の特産物である青谷の梅についての学習では、近隣の農家で梅の収穫をする体験をさせてもらい、梅についての話を聞き、自分でもまとめて発表することができた。調べたりまとめたりした経験がなく、その方法がわからずまとめるのに苦労していたが、次第に発表のパターンがわかってきたようだった。</p> <p>豆腐づくり：自校栽培のダイズを使っての豆腐作りでは、乾燥したダイズが水を吸収して大きく膨張することに驚いたり、大量のダイズを収穫することのむずかしさに気づいたりすることができた。また、問題意識を持ってダイズの栽培方法を農業に詳しい人へのインタビューや、インターネット検索で調べまとめることができた。</p> <p>和太鼓：和太鼓の取組では、意欲と自ら考えることを大切にしている。発表の前の紹介文を教師と一緒に考えたり、自分が太鼓をたたいている様子をビデオでの映像を参考にさらにもう上達するための工夫を考えたりするようになった。当日は自信を持って演技を発表し、達成感を味わうことができた。</p>



オ 変化と成長

1年間を通しての「作物栽培」「地域の特産物としての梅」「ダイズ栽培から豆腐づくりまで」等の育てる、調べる、作る体験的な活動を通して自ら考える力がついてきた。

体育大会では、全体の前で号令をかけながら整理体操をしたり、終わりのあいさつを自分の感想も交えて行ったりすることができた。学習発表会の和太鼓の取組では、いくつかの案の中から振り付けの一部を自分で選択することができた。自分が太鼓を打っている姿を見て、改善すべき点も言えるようになった。

教科学習では、体験や実験観察を大切にした授業を通して、自分の考えをまとめ、発表する方法も身に付けた。

突然退院することになり、病弱教育部の仲間と別れることになった。転出の挨拶文の内容も自ら20分程度考え全体の前で読むことができた。転入当初であれば、自分の思いを発表する場面では考え込んで固まって動けなくなっていただろうが、挨拶文の作成には時間がかかったものの自ら考え発表することができた。

カ 前籍校に戻って

転出後約1週間は、2～3回教室に顔を出したそうである。その後、相談室登校になり、体育のバスケットボールの時だけクラスの友達といっしょに参加することができた。6年生になり、毎日は学校には行けなかったものの、修学旅行やクラブの時間のバスケットボールへは参加できたようである。

キ 再び転入

前は、A児にとって自分の意志で決めた入院ではなかった。しかし今回は中学校への進学も考え、未学習部分を埋めて自分に自信をつけて中学校に行くため、自ら入院することを決めた。5年生の時に比べ、考え込んでしまっただけで動けなくなることも少なくなっている。

ク 成果と課題

(ア) バスケットボール

前籍校に戻り、学校に行くための「ツール」として、一番よく活用できたものが自立学習で取り組んだバスケットボールである。一番好きな活動であり、本校に来てより一層上達したことで自信にもなり、前籍校の子供たちともつながっていくことができた。自信の持てる新たな「ツール」を本人と共に探していきたい。

(イ) 自己決定

何か自分で決めなければならない場面に直面した時、時間を要するが周りの大人が決めるのではなく、選択肢を示し辛抱強く待ち、「自己選択」や「自己決定」する力を育んできた。現在本校で前向きな学校生活を送ることができる力につながっている。今後様々な自己決定を必要とする場面を意図的に設定し「自己選択」や「自己決定」する力を一層高めていきたい。

(2) 中学部の取組

日常生活上の課題解決に向けての取組< 中学部3年生Bの実践例 >

ア プロフィール

学 年： 中学部 3年 男子

診 断 名： 気管支喘息

在籍期間： 中2年10月 ～中3年11月の約1年1カ月

イ 転入までの経過

中学校1年1月に九州から前籍校へ転入し、学校には行っていたが教室へはほとんど入れていなかった。本校へは中学部2年10月に、気管支喘息で受診したのをきっかけに転入した。

ウ 実態と目標設定

(ア) 実態

一日の生活において、転入してきた頃は始業までに登校できなかつたり、昼食のため病棟に戻ると午後の授業に間に合わなかつたりして、指導者が病棟へ迎えに行くことが度々あった。また、集団の中に入るのが苦手で、思い込みも強く、自分の思い通りにならない時や予想外のことが起こると、興奮していきなりカッとなってしまうこともあった。また、なげやりな言葉を発したり、反抗的な態度を示したりすることもあった。ストレスが溜まると物に当たり、教科書等を破る、投げつける、ラジカセを壊す等の行動も見られた。

教室で学習している時、廊下を人が歩いてくる姿が窓ガラス越しに見えると、必ずそちらの方を見るなど他者を気にすることが多かった。

整理整頓が苦手、忘れ物が多い、時間がない時でも本などを整理し始めるときれいに並べ終わるまでは落ち着いて次の課題に向かえない、等の様子が見られた。さらに、他人の物を無意識のうちに自分の所有物として扱い、借りた物を返さないことも度々あった。

上記のような課題をたくさん抱えてのスタートであったが、「ほめられたい。」という気持ちが非常に高く、「ほめる」ことにより多くのことに挑戦し、それを糧に前向きに活動に取り組めた。

《WISC-Ⅲの結果》

VIQ と PIQ には有意差はない。群指数においては、言語理解の能力や聴覚的短期記憶、視覚認知能力が低い傾向にあり、視覚的短期記憶が高いと仮定できる。

《検査から見られる特性》

- ・できないことで気持ちが落ち込み、検査の途中で体調不良を訴え中止し2回に分けて実施した。
- ・できない時のできないことへのあきらめの早さが目立った。また結果のみに目が行き、途中経過が考えられないなどの特徴がみられた。
- ・語彙数が乏しく、一般的な知識、基礎的な学習による知識の習得や言語概念化や語の想起の弱さが考えられる。また対人関係や社会性の面での弱さがある。
- ・数的処理能力や計算力やワーキングメモリーの弱さがある。
- ・具象物への視覚的な細部への気づきはあるが、重要な部分に目を向けられないため、集団行動

や授業場面では大事なことを見落とす可能性がある。

- 全体のイメージがつかみにくく、部分と全体を把握する力や組み立てていく力が弱いので、操作するためには、何らかの手がかりがないとわかりにくい。方向や位置関係、距離感などを捉えるのが苦手な可能性がある。
- 場面の变化や新しい状況に対応するのに苦手さがあり、情報量が増えると分かりにくい。
- 話の文脈から考えて人物の表情や動作が説明できず、他者の感情認知の不全があると考えられる。
- 1対1で順を追って、視覚的に見比べる力はある、機械的に書き写したりすることは弱くないと考えられる。

(イ) 目標設定と支援方針

a 達成目標

- (a) 始業に間に合うように学校に来る。
授業が始まるまでに、その授業の教室へ行く。「ベル着」
- (b) 必要に応じてクールダウンをうまくとる。
- (c) 気持ちのコントロールを図る。
- (d) 忘れ物を減らす。
- (e) 借りた物は、必ず返す。

b 支援方針

- (a) 点検表をつくり、達成できたことを目で確認し評価する。
- (b) 毎日、終学活で一日の振り返り、達成できた内容はしっかりとほめる。
できなかった内容については、共に対策を考え、翌日は達成できるように工夫する。
- (c) がんばった様子を保護者に伝え、保護者からもほめてもらう。
- (d) 一つの課題が解決し目標が達成できたら次の目標へとステップアップを図り、意欲につなげる。

エ 取組内容

(ア) 時間通りに学校へ来ることを意識するための「B君がんばり表」の取組

資料1

2年生まではB君との関わりがなく、全く様子を知らない者が学級担任になった。また、最上級生としての自覚も芽生えていた。この時期を、これまでの自分を振り返り成長できるチャンスと捉え、ベル着を中心とした「B君がんばり表」(資料1)の取組を始業式の日提案した。

「B君がんばり表」について

1日がんばれば20点(朝の登校が一番の課題なので10点、昼食後の登校が5点、残りのベル着は1点)1週間がんばれば100点になる。
毎日終学活で振り返る。

B君がんばり表		月	火	水	木	金
8:30登校	5点					
8:35~9:00	2点					
9:00~9:45	1枚時					
9:55~10:40	2枚時					
10:50~11:35	3枚時					
11:45~12:30	4枚時					
12:30~13:15	下校・昼食・診療					
13:15~13:35	登校					
13:35~14:20	5枚時					
14:30~15:15	6枚時					
15:15~15:30	掃除・終学活					
15:30~16:00	帰校準備・下校					
1日の合計点数						
8:30 登校 :10点 13:30 ~ 13:35 登校:5点 12,3,4,6枚時 ベル着 :1点		月 日(月)~ 月 日(金)		点		

B君は一週間の目標として100点を目指す決意表明をした。気持ちがすぐれず遅刻したこともあったが、その都度点検表を見ながら振り返ることにより、翌日から意識して取り組む決意をして病棟に戻ることができた。

金曜日に1週間の振り返りとまとめをして下欄枠に記入し、達成状況を確認する。100点になったときの喜びは大きく、翌週の意欲につながった。週末には、保護者に「がんばり表」を見せて意識的に取り組んでいる様子を伝えた。保護者にもほめてもらえるようになり、より意欲的にがんばれた。以前は、ほとんど集会や他学年との合同授業に入れなくて、別室で授業を受ける様子が見られたが、徐々に参加できるようになってきた。またそのことが自信につながり、約2ヶ月で100点を連続して取ることができるようになった。

やればできる、と大きな自信に繋がり、同時に集会などの司会や発表も全員の前でできるようになっていった。

(イ) 授業参加のための「クールダウン表」の取組

始業には間に合っても、気持ちがイライラして途中で保健室に行って授業に参加できないこともあった。そのため、気持ちを落ちつける、切り替えるためクールダウンの時間を設定した。本人とよく相談しルールに基づいて「クールダウン表」(資料2)を作成し取組を行った。5月より実施したため、「がんばり表」の取組と重なったが、資料2
前向きに取り組めた。

「クールダウン表」について

クールダウンの場所：校内の畑周辺が中心
精神的安定を図るため、作物の栽培に取り組んでいる。そのため、本人が畑を希望した。
一日の持ち時間は30分で、磁石を6個用意する。
1個について5分とする。
黒板の表に使用予定分の磁石をつけ、行き場所、時間を告げてクールダウンをする。
1日合計30分以内ならOKで、終学活で緑シールを貼ることができる。

時

クールダウン表					
名前()					
月 日～		月 日まで			
	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					
6					
合計					
1日30分以内をめざそう					
一週間の感想					

時間の長さを感覚的に把握する力が弱いため、5分で磁石1個と時間を見える形にした。磁石の数を意識しながら、クールダウンの時間を自分の気持ちとすりあわせて調節できた。毎日緑シールになるように意識して取り組めた。少しずつ気持ちも安定し、クールダウンの取組も定着してきたので約1ヶ月で打ちきった。

(ウ) 感情をコントロールするための「B君イエローシール表」の取組

5月末の学級活動中、B君が大切に飼っている熱帯魚の水槽の掃除を行った。一生懸命スポンジで水槽ガラスを洗っている時、勢い余って汚水が顔にかかってしまった。その途端、感情が一気に高ぶり水槽を素手でたたき、割れたガラスで右手首を切り、10針縫うけがをした。そのことをきっかけに「B君イエローシール表」(資料3)の取組を開始した。

「A君イエローシール表」について

イエローシールになるときの表を点検表に貼る。

**これをやってしまうとマイナス黄シール
カットとなったとき**

- 教科書やノート、プリントをくしゃくしゃにする
- チャットと言う
- アルトリコーダーをなげる。おる。
- カセットなど物をこわす
- シャープペンシルで机をたたく

安定していた時間は緑シールを、5項目に該当するとイエローシールをはる。

けがをしてしまったときは赤シールを貼る。

時間シール表 月 日 ~ 月 日 書き方

	月	火	水	木	金
1	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
2	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
3	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
4	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
5	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
6	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした
注意書	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした	なぜ どうした

けがをしたとき赤シール

毎日、緑シールになって達成感を味わいたいこと、保護者にほめてもらいたいことで、感情が高ぶりそうな時でも必死に自分の気持ちを抑えようと努力した。この取組を通して意識して感情をコントロールしようと努力するようになり、落ち着いた学校生活が送れるようになった。

(エ) 忘れ物をなくすための「忘れ物ゼロへ挑戦」の取組

以前と比較して精神的な安定も見られ、2学期の目標として「忘れ物ゼロへ挑戦」(資料4)「借り物表」(資料5)に取り組んだ。

「忘れ物ゼロへ挑戦」について

忘れ物があった場合は、各教科の時間ごとに忘れたものを書き込む。

当初は、忘れ物ゼロというより、忘れ物を忘れ物として自覚して、忘れ物表につけることを目指した。

毎日終学活で振り返ることで、意識的に授業に必要な物を準備して登校することができるようになってきた。

(オ) 借りた物を返す習慣を付けるための「借り物表」の取組

人と自分の物との区別が付かず、人に借りた物を自分の所有物と思い込み、返却しない様子が度々見られた。

「借り物表」について

人から物を借りた場合、借りた物と日時を記入する。借りた人に返すと、返した日時と受け取った人が確認のサインをする。

この点検表をつけることにより、物を借りたことについて、借りているということが自覚できるようになってきた。また、「忘れ物ゼロへの挑戦」と同時に取り組むことで借りることも少なくなってきた。

忘れ物ゼロへ挑戦 月 日 ~ 月 日

	月	火	水	木	金
1					
2					
3					
4					
5					
6					
注意書					

今日の感想

借り物表

月	日	借りた物	誰に借りた	返した日時	サイン

オ 変化と成長

点検表という目で見える形での取組を通して、達成状況が本人にもよくわかり意欲的に取り組めた。また、点検表を通じ母と子の会話がプラス方向に推移し、より一層本人の意欲向上につながった。この取組を一つの機会に、多少気が向かないことがあっても毎日遅刻せずに登校でき、授業に参加できるようになった。まだまだ不十分さは否めないが、自分の感情をコントロールしよう意識できるようになり、人の物と自分の物の区別や、忘れ物をしないようにとの意識が高まった。

2学期には、全校の取組である体育大会や学習発表会に最上級生として意欲的に参加した。特に体育大会の閉会式では、全校の前で閉会の挨拶を生徒代表としてやり遂げることができるなど、大きく成長する姿が見られた。

少人数の病弱教育部で培った力を前籍校に戻って発揮できることが大きな課題であったが、11月より前籍校に戻り特別支援学級で毎日元気に通学し授業にも参加できているとのことである。

《転出作文》

ぼくは、今日退院することになりました。二学期になってからたくさん悩みました。だけど今は、ものすごくスッキリした気持ちです。

今までの自分をふりかえてみて、本当に成長できたなあと思います。例えば、物をこわさなくなったことや自分の気持ちをおさえられるようになってきたことが、自分でもビックリです。あと、「ありがとう」と「ごめんなさい」を言えるようになったことです。

ぼくがみんなと学校生活を送ってきた中で、一番心に残った思い出は、やっぱり体育大会と学習発表会です。

それと、先生方にもお世話になりました。しかる時はしかってくれて、楽しむ時はいっしょに楽しんでくれて、ありがとうございました。


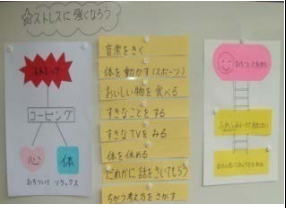
前の学校に戻ってからみなさんのことを忘れず、がんばっていきたいと思います。今までありがとうございました。

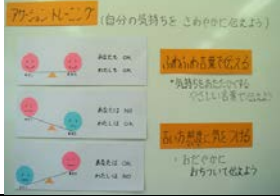
(3) 自立活動の取組

今年度の研究テーマを受けて、自立活動でも指導内容を工夫してきた。個別の実態を考慮して、自立活動でもテーマに沿った個人の目標を設定している。

ア 取組内容について

1学期、2学期に取り組んだ具体的な活動は以下のとおりである。(抜粋)

	主な内容	ねらい
4月	<ul style="list-style-type: none"> ・ふわふわ言葉、ちくちく言葉 ・「そうですね」ゲーム ・目は心の窓(顔の表情で喜び・悲しみ・怒り・驚き等を伝える) 	人の気持ちを温かくする言葉、傷つける言葉を学習する。人の話を聞く時の基本的な態度を知る。 
5月	<ul style="list-style-type: none"> ・ストレスパターン診断テスト 	自分がどんな時にストレスを感じやすいかを知り、コーピング法を学ぶ。 ※コーピングとはストレスを何とかしようとする行動(対処)のこと。 

6月	・はっきり理由を！（ロールプレイ）	自分が言いたいことを上手に相手に伝えるには、どのような言葉遣いや態度をとればよいかをロールプレイを通じて考える。
7月	・いいところ みつけたよ	自他の長所やがんばりを見つけてカードに書いて、掲示をして相互に認め合う。
10月	・4つの窓	紙に書かれた4つ窓に自分の答えを記入した後、だれが書いたかを当てていく。自己を表現する力と他者理解する気持ちを高める。
11月	・あなたも OK わたしも OK (PART 1、PART 2) (アサーショントレーニング)	アサーティブな対応について知り、さわやかに自己表現する方法を学ぶ。 
12月	・あなたも OK わたしも OK (PART 3)	11月からの継続指導

イ 成果と課題

1回の授業で成果を望むことは難しいが、回数が多くなると子どもたちの意識の中に自分を振り返る力や、言葉を大切にしようという気持ち、言動を考えようとする思いが芽生えているのが感じられる。

今後も、在籍している子どもの実態を把握しながら指導内容を工夫したコミュニケーション活動を継続していく。

また、コミュニケーションの力をつけていくためには、自立活動以外でも教科、行事等の日常生活全体を通じての指導が必要である。教育部内の教師全員が同じ視点や意識を持って子どもに接することを今後も心がけなければならない。

自立担当者以外でも指導できるよう、教師の研修を積み重ね、専門性の向上を図る必要がある。（この活動の内容を具体的に紹介するために、11月に行われた校内研究授業の指導案を資料6として末尾に記載する。）

(4) 認知特性に応じた教科の取組

病弱教育部では、転入時に認知面のアセスメントの手段の一つとしての WISC-III をはじめとした知能検査やバウムテストなどの心理検査を行っている。また、教師の力量を高めるために、教育部内で知能検査や心理検査の研修を行っている。そして、検査の結果や日々の実態を交流し、児童生徒の指導の手だてを明らかにして、授業や日々の指導に活かしている。

ここで、教科指導の取り組み（小学部算数、中学部国語）を紹介する。

ア 小学部算数の取組

(ア) 児童の実態

知的水準は平均の下、言語性 IQ と動作性 IQ には 5% 水準で有意差があり、解釈には慎重を要した。

また、言語性検査と動作性検査の平均を比べると、言語性検査の方が点数が高く、どちらかと

いうと、言葉を使って理解したり、伝えたりということの方が得意で、目で見ても情報を捉え、書いたり、操作したり、構成したりすることが苦手という様子が認められた。

情報処理の仕方という視点で捉えると、「積木模様」「組合せ」が、「算数」「数唱」（順唱＞逆唱）と比較して困難さが著しい点や「積木模様」の答え方が部分部分を順番においていく様子から、同時処理的な弱さがあり、継次処理的な方がわかりやすいと考えられた。

「積木模様」「組合せ」の困難さ、「符号」「記号」では、ミスはないが、1つ1つ見本を見てやり、数がこなせず、形の取りにくさもある点から視覚認知の弱さ、視覚的短期記憶の弱さ、情報量が多いと混乱するなどが認められた。

また、WISC-III、新版K式検査の中で、図と地の判別の困難さが見られた。学習場面では、字形の取りにくさ、漢字の苦手さが見られ、算数では、四則計算の筆算では、計算していくうちに位の位置がずれてくるなどの様子が見られた。

4年生の算数では、1学期に「わり算の筆算」「小数」や「垂直」「平行」「平行四辺形」「台形」「ひし形」を学ぶため、困難が予想された。

視機能検査の結果、眼球運動では追従視・跳躍視ともに目が外れて跳んだり、目をパチパチさせたりと弱さが見られ、輻輳では右眼の寄り幅の狭さが目立った。

(イ) 手だて

<わり算の筆算>

- ・九九の20問プリントから取組み、50マス問題量を調整しながら九九の習熟を図った。
- ・操作的な活動を通して、割ることの意味の再確認と上の位から割っていくことを結び付けて意識付けした。
- ・わり算の筆算の手順表を用意し、右手隠しを徹底し、商の立つ位置の見つけ方を定着させる。「たてる→かける→ひく→おろす」の手順を声に出して意識させるようにした。

<小数>

- ・単元の学習の導入を継次処理的な指導方略で行った。
- ・0.1を初めから教え、0.1が10個で1となることで、小数の大きさがどれくらいかを確認し、0.1や0.2の関係を理解させるようにした。
- ・小数の計算（筆算）では、1は1.0と小数点をつけて考えるようにさせるようにした。

<垂直・平行と四角形>

- ・パワーポイントの自作教材を作成し、視覚的なものに言葉を結びつけて理解を促した。
- ・垂直や平行な線、図形のかき方には手順表を作った。
- ・垂直な線、平行な線や図形を見分け易いように色を変えたり、徐々に色を単色にしたりと宿題プリントの工夫をした。

*自立活動にビジョントレーニングを取り入れ、図と地の判別を中心にしたフロスティグ学習ブックに取り組んだ。

(ウ) 成果と課題

<わり算の筆算>

- ・問題量を調整し、意欲を失わないようにしたが、2桁÷1桁は「得意」意識が持てたが、3桁÷1桁は苦手意識を持たせてしまった。手順表を使うこと、声に出して手順を意識させることで、筆算の仕方は定着したが、同じ手順の繰り返しでも、割られる数が3桁になると手順にとまどう場面が見られた。
- ・計算ドリルをそのまま宿題にするのではなく、ノートに書き写したり、課題プリントとして印刷したりして渡すことで、苦手な計算ドリルをこんなにやったのだ、という達成感を持たせることができた。

<小数>

- ・日常生活の中で小数を実際に見たり、聞いたりしているので関心を持って学習に入ることができた。
- ・テープ、水などを0.1、0.2、0.3・・・と部分的である0.1から全体の1という大きさにできることを知ることで、表記の仕方、関係が分かりやすかったようだ。小数の導入で小数に対する苦手意識を持つことなく入れたので、計算も位をそろえることがしっかり意識できた。

<垂直・平行と四角形>

- ・自作教材はただ見せるだけではなく、本児を前に出させ、教師の役目を与え、クイズ形式にすると意欲的に取り組めた。
 - ・色を変えること、図形を塗りつぶすことで見る視点がはっきりし、見えやすくなった。徐々に、色を単色にしたり、図形の塗りつぶしを減らしたりすることで、テストでも困難なく見分けることができるようになった。
- *短期間でビジョントレーニングに取り組むのは難しいが、WISC-IIIの結果を踏まえ、アセスメントの一つとして視機能検査を活用し、活動の中に取り入れていくことは有効であると思った。

イ 中学部 国語の取組

(ア) 生徒の実態

現在中学2年だが、小学4年のころから不登校傾向で、小学6年から転出入を繰り返しており、諸事において、積み上げ、経験不足である。苦手なことや未経験のことには尻込みすることが多かった。国語では、漢字を書くことと作文が苦手であった。中学1年の頃は、内容を理解していてもテストになると、文章で答える問題はほとんど空欄であった。

<検査から見られる国語に関する特性>

- ・「聞く」「話す」の力は高いが、「読む」「書く」の力は幼い。
- ・事務的処理の遅さ、目と手の協応の弱さがあり、書字の苦手さがある。
- ・全体のイメージがつかみにくく、部分と全体を把握する力や組み立てていく力が弱い。
- ・言語で理解したり表現したりする力はあるが、その力を、実際の生活場面、友達関係の中で使うことが難しい。

(イ) 手立て

<漢字>

- ・偏や旁など、組み立てに着目→細マジックでA5用紙に大きく書く（目と手の両方でしっかり意識付けする）→漢字プリントで練習→漢字5問テスト（毎時間）→漢字10問テスト→定期テスト対策練習の流れで指導し、定期テストの結果に結びつくようにした。
- ・各テストに際しては、練習表の作り方や練習方法も指導し、前日練習と直前練習をするようにした。

<感想文> 指導の手順

- ①書く前にまず口頭でどう思ったか、どこが気になったかなどを確認する。
- ②30マスのミニミニ原稿用紙に、思ったこと、気づいたことを書く（資料7の1）。
- ③それを集めて、順番を入れ替え、構成を考える。
- ④それを見ながら、400字詰め原稿用紙に書く。
- ⑤推敲する（資料7の2）。

(ウ) 成果と課題

漢字については、定期テストの時には熱心に練習し、成果が上がった。日々の小テストでは前日練習ができないことも多く、練習したときとそうでないときの差は歴然としており、まだ学習習慣がついたというところまでは至っていない。クラスによきライバルが存在するときにはやはりよく学習する。心理的な面も大きいと思われる。

作文については、苦手で書けないと思い込んでいるふしがあるので、自分にも書けるのだということを自覚させたいと思い、6月に3時間使って感想文の授業に取り組んだ。

どう思ったかを口頭で述べる際にも、すぐに言葉が出てこなかったが、気になったことや共感したところなどを出していき、それを30マスにメモしていくという形で作業を進めた。その用紙が5枚くらい書けると、少し書けたという気持ちになった様子だった。さらに、それをどんな順に並べるか、一緒に相談しながら並べ替えをした。その後、それを見ながら書く作業に移ったが、その際に接続詞の使い方などが気がかりで書けなかったので、後で推敲してもよいことと、順接、逆説、話題転換などの接続詞を教え、接続詞を選択させたりしながら書き進めた。そうしていううちに、メモにない文章も書き加え出し、400字程度の感想文が書けた。書いた後の見直しもした。書けたことに充実感を感じている様子であった。中学2年としてはまだまだであるが、書けたことを大きく評価し、この3時間でやったことが、作文を書く手順であることを中学生らしく確認した（メモ→構成→文章化→推敲）。それ以降、テストの文章問題も空欄がほとんどなくなり、短歌の授業では自分から短歌を作ってきたりもした。夏休みの感想文の宿題も自力で書いて提出できた。

4 おわりに

『ライフステージ』とは人生のある時期や段階を意味し、ある瞬間ではなく一定の特徴のある「期間」で、「乳児期」「幼児期」「児童期」「青年期」「成人期」「成熟期」等に区分される。また、その「期間」における人の生き方や生活の仕方で、出生、入学、卒業、就職による社会参加など、成長や成熟の度合いに応じた人生の移り変わりでもある。それぞれの段階には「連続性」があり、充実した人生を送るため将来へ向けてその「連続性」を意識した指導や支援が重要であると考え、その観点に立ち「一人一人のライフステージを考えた指導の工夫」についてこの2年間取り組んできた。

小学部では、体験的な学習を可能な限り多く取り入れ、自分で考えて行動し表現する機会を意識的に設けるようにした取組内容を紹介した。その取組を通して本人が自信を持つことができるものを見つけ、今後の人生においても必要とされる自己決定をすることの大切さを学ぶことができた。

中学部においては、学校生活における日常的な本人が抱える課題に対しその解決の糸口を探ってきた。チェック表に色別シールを貼ることにより日々の課題を可視化し、本人が自らの課題に気づき、適正な評価を通して課題を乗り越えようとする態度が見られた。

自立活動は、最近入院してくる児童生徒が「コミュニケーションの力」が弱く、人とうまく関係がとれないことで学校に行きづらくなる傾向が強い、という課題解決に向けての取組である。日常の学校生活において友達から、また友達に対してどういう態度や言葉掛けをするとスムーズに関係がとれるのか、あるいは自分がどんな場面でストレスを感じるのか、ロールプレイにより意図的に場面設定した授業内で、体験を通してよりよい解決方法を考える機会となった。

認知特性に応じた教科の取組は、日々の実態や検査結果を学習指導の手だてを考える上で活用した実践例である。前籍校での授業の「分かりづらさ」の原因が認知特性に起因する場合が多い。手だてを打つことにより授業が「分かる」からさらに「できる」に変化したことを実感し、自信につなげることができたケースの紹介である。

近年、病弱教育部に在籍している児童生徒の教育的ニーズは多様化してきている。多様なニーズに応えるため、個々の、より正確な実態把握や個別の教育支援計画、個別の指導計画の更なる充実が必要である。また、在籍期間が短い児童生徒に対して短期間で実りある実践内容を考えていくこともこれからの課題である。

本校での在籍期間は彼らの長い人生においてはほんのわずかに過ぎないが、将来の充実した人生を送るため次の「ステージ」を目指す糧となるような活動内容を目指し、更なる充実を今後とも追究していきたい。